

1. ディベートとは [4要件、コンセプト、価値]
2. この同好会で扱うディベート [Policy Making DEBATE]
3. モデルディベート [鉛筆かシャーペンか]
4. 審査の仕方
5. 試合の流れ [準備 実戦]
6. 立論の作り方
7. 実際に反駁してみよう!
8. 簡易ディベート用語集

アリストテレス「弁論術」

弁論術は、弁証術における推論がそうであるように、相反する主張のいずれについても説得することが必要とされている……だがそれは、相反することの両方を説得することを目指しているのではなく(なぜなら悪いことは説得すべきでないから)、事の真相がどうであるかを見落とすことのないためであり、また、他の誰かが議論の扱いを正しく行っていないときには、われわれが直接にそれに反論できることを目的としているのである。

JDA(日本ディベート協会)ホームページ

筋の通らない議論に対して、どう筋が通らないのかを適切に指摘することはかなり高度な訓練を積まなければ難しく、詭弁に対する反論はさらに難しい場合があります。このため、正しい判断を行うために詭弁を排除するためには、高度なディベート能力が必要とされるのです。できるだけ多くの人々が詭弁を見抜ける能力を持つことにより、詭弁も通りにくくなり、適切な判断ができる社会が実現できるでしょう。

山中允 [JCDF&NAFA セミナー(2000.11.5)]

ディベートに特徴的な一つのことは、理論に正解がない、ということではないでしょうか。何かを以って正解と任じるのは、思考過程を合意できる基盤で止めていることに他なりません。ディベートでは、その基盤を深く深く掘り下げるべく、ときに常識に逆らって、ときに規範を批判しながら、創造的な意図をもって、慣習の力を打ち壊していきます。

1. ある特定の一つの論題について
2. それを肯定する側と否定する側に無作為に分かれ
3. 一定のルールに従い
4. ジャッジや聴衆という第三者を論理的に説得すること

ディベートは、基本的には上記の4要件を満たしていれば成立します。

特定の論題を設けるのは、議論が無駄に拡散するのを防ぎ建設的な議論をするため。論題は日常によくある「~について」という曖昧な形式ではなく、「~すべきか否か」という形で策定されます。

肯定・否定に無作為に分けられるのは非常に重要なことで、これによって、議論を常に賛否両方の視点から見、常に自問自答することが要求されます。そして観念的・独善的な思考に陥ることを防ぎ、自分の主張が洗練されます。

ルールと言いますが、これは特に難しいものではありません。例えば、一番最後のステージで新しい議論を出し、相手が一度も反論できないような状況を作り出すことを禁じているもの(New Argument)や、異常に多くの論点を出し、相手を混乱させることを禁止するものなど、至極当然なルールのみが存在します。

そしてディベートが一般の討論と違う大きな点は、議論を戦わせる相手ではなく、第三者を論理的に説得することを目的としていること。どんな人にも理解させられる、普遍的な議論を作り上げるためのものです。具体的にどのような効果があるかを示すと、例えばディベートでは説明なしに難解な専門用語を使うことはできません。なぜなら、同じ論題について調べ尽くしている相手に伝えることができたとしても、勝敗をつけるべき第三者に議論を「伝える」ことができなければ意味がないからです。

以上が、ディベートの4要件と言われることです。

では「論理的に説得する」とはどのようなことなのでしょう。ここにディベートのコンセプトが存在します。「論理的」とは全ての主張に根拠が伴っていること、つまり「証明」が重ねられていることです。

たとえばAとBどちらが良いのかを論じるときに、最初にAが良いということ、Bが良いということ、つまり比較以前にそれらが本当に「良い」ことを証明します。次に、「Aor B」は「~という価値基準でBor Aより良い。なぜなら~だから」と証明します。けれどもその裏には「その基準は……だからこの比較には適している」という証明が必要となります。その裏にはさらにAとBは比較すべきなのかどうか、またその比較の持つ意味についての証明(議論)も必要となります。

このようにディベートとは、思考を深く深く掘り下げていくことを重要視する学問だと言えるでしょう。

ではここで、一般的によく言われるディベートの価値・効用を紹介しましょう。

1. 論理的思考力が身につく

もっともよく言われると同時にもっとも実感の持ちにくい効果です。

ですが目次ページの資料のように「論理的を装った非論理」(詭弁)を、適切に打破できるかどうかという観点で考えれば分かりやすいと思います。「何かが変わった」と思ったことの、何が変でどこがおかしいのかを弁別し、指摘するためのスキルをディベートは与えてくれます。

2. 考えをまとめ、そして表現する、プレゼン能力の向上を図れる

たとえば運動をする時は、何らかの負荷をかけることで筋力のアップを図ります。ディベートにも同じことが言えます。ディベートでは、意味を持ったルールと限られた時間の中で、論理的な主張を組み立て、口頭で発表する必要があります。つまりディベートでは、自分の主張を最低限の時間で、効率よく正確にまとめながら発言していく必要があるのです。そのため、何を強調して何を削れば議論がスムーズに進み、そして自分の主張をクリアかつ正確に伝えられるのかが分かるようになります。何より、ディベートでは口頭以外のプレゼンテーションは認められません。つまり実際にスピーチする場面で、話を分かりやすく噛み砕き、適切な速度や抑揚で話す努力が必要になります。

3. 現代社会の本当の問題を知ることができる

これは必ずしもディベート固有のメリットではありませんが、競技ディベートではほとんどの論題が、深刻な時事問題を扱います。そしてディベートのための調査を続けていくうちに、自分達がいかに無知で、深いところにある知識や事情、考え方を知らないかが明らかになります。そして議論を掘り下げていくにつれて、その論題だけではおさまりきれない、現代社会の様々な問題を生み出している根源的な理由 人間の矛盾、国家のせめぎあいなど が見えてきます。これにより、世界はどう動いているのかがおぼろげながら見えてくるほか、外交・政治・企業戦略、様々な場面において知識を活用でき、そして「正しい」「深い」事情を把握することで、誤った観念などではない、社会的インテリジェンスの向上に結びつけることができます。

4. 膨大な情報を処理し、理解できるようになる

人の話からインターネットまで、ディベートをする時にはあらゆるチャンネルに、意識のアンテナを向けている必要があります。自分の目当ての資料を探し出し、数百冊・数千点は下らない資料を実際に収集し、整理し、使いこなしていくという経験を経ることで、確実な処理能力が身につきます。

また、試合中は反論するために相手のスピーチをしっかり聞き取って理解しつつ、要点を整理して頭の中と手元のメモに残していく必要があります。音声情報の整理力とも言えます。

そして、膨大な情報をしっかり理解することが求められる環境の中で、情報に対する理解力を深めることができます。

5. 貴重な友人ができる

競技ディベートの特権とも言えますが、試合や準備を通して、チームメイトや試合相手との交流が非常に深まります。それ自体の楽しさも去ることながら、ディベートをしている人は、広い知識とそれについて深く考えることの好きな人が多いです。ディベートで得た彼ら友人は、将来、非常に有益な関係となるでしょう。



政策決定のためのディベート

ディベートには様々な種類がありますが、主にこの同好会や、「ディベート甲子園」などで扱うディベートは、Policy Making Paradigm Debate というものです。

(Policy:政策 Make:策定 Paradigm:方式・次元)

つまり、「(日本)政府は 〇〇 という政策を採用すべきであるか否か」という論題で、ディベートを行うことになります。

そしてこの過程で、「メリット・デメリット比較方式」が出てきます。つまり政府が何らかの政策を取るべきかどうかを選択するとき、その政策によって実現する未来が今よりも良いものとなるかどうかで判断をするわけです。

そして、未来を良いものとする要素を「メリット」、逆に悪くしてしまう要素を「デメリット」として、メリットがデメリットを上回れば「よい未来が待っている」として論題(その政策)を導入すべきという結論が得られ、逆にデメリットがメリットを上回れば「悪い未来が待っている」として論題は否定されるわけです。

また、メリットデメリット比較方式はあくまでディベートの一つの方法でしかありません。

< 論題例 > 日本は道州制を導入すべきである 日本は死刑制度を廃止すべきである
日本は陪審制を導入すべきである 日本は首都機能を移転すべきである

論題の種類

上記に述べた政策以外のものもディベートの対象となります。

そして、ディベートで扱う論題は大きく3つに分類できます。

1. 事実論題 「邪馬台国は北九州に存在したか否か」のように、事実の有無を論じるものです。様々な資料・論拠を用いた、具体的な事物に関する証明が極めて重視されます。
2. 価値論題 「人間にとって最も大切なのは愛であるか否か」など、価値観の妥当性を論じるものです。哲学的な掘り下げを、深く行っていくことが重視されます。
3. 政策論題 「日本は原発を廃止すべきである」、例えばこの論題で、エネルギー安定供給の問題と原発労働者被爆を論じれば、そもそも原発がないとエネルギー供給は不安定になるかどうか、という証明をする事実論題の要素と、国民全体の利便のために、一部の人間が明らかな危険を背負ってよいのかどうかという、価値論題の要素があみあうことになります。

メリットデメリット比較方式

非常に分かりやすいこの方式は、それぞれ次のような構成を持っています。

[発生過程]メリットあるいはデメリットが発生する確からしさ

[重要性/深刻性]そのメリットかデメリットの持つ価値や深刻さと論題との適合性

つまり、非常に重要で価値のあること、あるいは非常に深刻なことが起こると主張したとしても、その起こる確率が極めて低ければ全体としてのメリット・デメリットは小さいと判断されるわけです。

逆に、確実に起こることが予見されていても、それが論題に即したとき大した価値を持たなかったり、あるいは重要性や深刻性が低かったりすれば、やはりそのメリット・デメリットは小さいと判断されるわけです。


- < 例 > ・ドリームジャンボ宝くじを買うべきである。3億円が当たるかもしれない。
・日本政府は3丁目の鈴木宅が留守のとき、その家のポチの世話をすべきである。
なぜならポチは近所の人気者だからであり、世話をすれば雰囲気の良いから。

そして様々な証明を交えて、ディベーターは、自分達のメリット・デメリットが、相手のものよりも大きいことをジャッジにアピールするわけです。そして、最終的に論題となる政策は実行すべきかせざるべきかを主張します。

では具体的に、どのようにディベートを進めていくのか、次頁で見てください。



論題「鉛筆とシャーペン、どちらを使用すべきか」

	鉛筆側立論	質疑	シャーペン側立論	質疑
鉛筆	<p>定義 鉛筆 木部と芯部で作られたものとする。削ることで使用可能になる</p> <p>メリット「環境保全」発生過程</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャーペンの材質はプラスチック 1.燃やすと有毒ガスが発生 2捨てても分解せずに残ってしまう <p>=資料：工学教授著『**』('99.1/5)</p> <p>鉛筆だと木なので解決</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そして平均で、年1人1本のシャーペンを使う 年1億本分の環境効果重要性 ・身近なことから環境を守るのは非常に重要 	<ul style="list-style-type: none"> ・芯を替えるだけで、シャーペンは使用可能になるんですよね？ はい ・木でできるシャーペンもありますよね わかりません ・鉛筆 = 木ですね？ はい ・シャーペンの年間廃棄量ってどれくらい？ さあ。 		
 <p>ディベート甲子園のフォーマット</p> <p>肯定側立論 6分</p> <p>否定側質疑 3分</p> <p>否定側立論 6分</p> <p>肯定側質疑 3分</p> <p>否定側第一反駁 4分</p> <p>肯定側第一反駁 4分</p> <p>否定側第二反駁 4分</p> <p>肯定側第二反駁 4分</p> <p>それぞれの間に準備時間 1・2分</p>	シャーペン側	<p>デメリット「不便」発生過程</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆は削る手間が存在する 1.鉛筆削りを買う場合、1000円以上はかかる 2.買わなくても、10分ほどかけてナイフで削る必要がある <p>深刻性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10分は経済的に200円以上の価値 = 資料：x x 発行『+ +』('97.10/1) 例えば鉛筆を10回削るとすれば、1000~2000円以上の損失 ・非効率の原因の無用な損失は経済に悪影響 ・時間は大切なもの。効率性の追求が便利な生活を保障している 	<ul style="list-style-type: none"> ・ナイフで削る人っているの？ いるでしょう ・どちら人が削るんですか？ こだわ人や工作好きな人 ・つまり彼らは自分で鉛筆の先を調節することが不可欠なんですよね？ そうですねえ ・それを無用とか非効率とか言えるんですか？ ・効率重視で人間は幸せ？ おそらく。 	

シャーペン側第一反駁	鉛筆側第一反駁	シャーペン側第二反駁	鉛筆側第二反駁
<p>鉛筆からは環境保全のメリットは起こりません。むしろ環境を破壊するというデメリットを引き起こします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鉛筆は木を使用 シャーペンは芯さえ替れば何度も使える シャーペンをやめて鉛筆にする分環境破壊 ・そもそもプラスチック系廃棄物全体にシャーペンが占める割合が不明。それが示されていないと鉛筆がどれくらい貢献できるのか分からない。 それにシャーペンは壊れない限り使える 	<ul style="list-style-type: none"> ・捨てる時環境に優しいことは否定されていない 少なくとも廃棄段階で環境に優しいことは合意された ・また、鉛筆は副産材や間伐材から作られているから、木を余分に食っているわけではない 石油から作らなければならぬシャーペンよりも、原料段階で環境保全できることが証明された 	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちは何かを使用するかどうかの判断をする時、使用によって得られる利益と使用にかかる負担や労力を比較します。 ・鉛筆という身近なものに適用する場合、「不便」という明らかな負担を打ち破るほどに強く、明確な利益がなくてはなりません。 資料： 大学環境工学部教授 ** 著『**』('92.5/5) 「環境問題とは目に見えにくいものである。だが個人個人が少しずつ努力していかなければ手遅れになってしまう時代に来ている。みんなが環境に対する意識を高め、努力していく必要がある」 環境への貢献に関する解決的なさ ・鉛筆使用で解決できるのは、結局肯定側がさきほど示した「廃棄段階」でのプラスチックの燃焼による利益と、石油原料の保存だけです。 ・廃棄段階でのプラスチック。膨大なゴミの中でシャーペンが占めるのはほんのわずかで常識的に判断できます。つまりシャーペン使用をやめても環境問題にはほとんど貢献できません。資源保存も同様です。 ・こんな目に見えにくい微々たるメリットで鉛筆使用を選択させるのは間違っています。 ・このように強い動機がない以上、わざわざ鉛筆を使用する必要がありません。 	<p>私たち鉛筆派は、シャーペン側が提議した価値観、つまり環境に対するメリットが微々たる物であるという理由だけで、便利で多少なりとも環境に悪いものを使用しても、というものを否定します。</p> <p>資料： 大学環境工学部教授 ** 著『**』('92.5/5)</p> <p>「環境問題とは目に見えにくいものである。だが個人個人が少しずつ努力していかなければ手遅れになってしまう時代に来ている。みんなが環境に対する意識を高め、努力していく必要がある」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つまり、否定側の出した視点は、切迫している環境問題に関してはあてはめるべきではない ・少しでも効果があることはこのディベートでは合意されている。ならば鉛筆を使用すべき。 ・身近なところから初めなければ何も始まらない。否定側立論の最後にあった効率性の重視が現代の惨状を作り出しているのだ。

さて、前頁のモデルディベートのだいたいの流れはつかめたでしょうか。実際の試合でこの勝敗をつける場合、おそらく審査員(ジャッジ)の票は、判断が分かってしまうことが予想できます。

このモデルディベートでは、環境保護に関して、鉛筆には一定の効果があることは示されましたが、それが非常に微々たるものであることも同時に判明しました。

それについて否定側は「わざわざめんどくささを背負ってまで、そんな小さい成果を求めるのはおかしい」と主張し、対して肯定側は「今は一人一人が少しずつでも努力していくことが大切なんだ」と対立する論点を出してきました。

さあ、貴方はどう考えますか？ どちらの価値判断の次元が妥当なのでしょう？ 判定が分かってしまう原因はここに 있습니다。それは、どちらの論点が良いのかという明確な証明がなされていないからです。

つまり「どちらが良いのかという判断を、ジャッジの主観に判断まかせてしまう」部分が残っているからです。試合の中で勝つコツは、いかにジャッジまかせの領域を少なくしていくかということです。

ジャッジの仕方

基本的なコンセプト： 1. 普遍・公平 2. 立証検証 3. 教育的

1. 普遍・公平

客観的かつ理性的に判定しましょう。価値観の妥当性の判断以外の場面で、主観が混じる判断はすべきではありません。また、ルールには厳格に従います。

ex. 声が大きくてすがすがしかったので肯定側の勝ちとした..... x

ex. 声が小さいのは自分の主張に自信がないに違いないので負けにした..... x

ex. 規定時間をオーバーしたが、いいことを言ったので判定材料にした..... x

2. 立証検証

ある主張がしっかりと、論理性をもって証明されているかどうか、ジャッジは常に検証する必要があります。単に言ったからといってメリット・デメリットが発生するというものではありませんし、逆に言わなかったとしてもそれは全く勘案しないというものではありません。

ex. 肯定側は「地球は平らだ」と言い、否定側は何も反論しなかったので、

このディベートでは地球は平らだという同意がなされたと判断した。..... x

3. 教育的

自分がどちらかの立場に投票した理由を、しっかりとディベーターに伝えなければなりません。説明不足な講評、判定理由の説明は誤審との印象も与えかねないほか、ディベーターが次の試合で経験を生かすチャンスをも失わせることになります。

具体的なディベートの流れを説明していきます。

1. 準備

ディベートでは「準備8割本番2割」と言われるように、いかに事前に準備をすることが勝敗の鍵を大きく握ります。準備には大きく3つの種類があります。

A：論題関連の資料を集めること。

基礎知識を手に入れ、自分の立論を作り、反駁への対抗を考えるためには、前提となる証拠資料や多くの知識が必要になります。

B：演習

練習試合をしたり、想定問答集のようなものを作っていったりします。そしてディベートそのものに対する理解を深めることで、より深い議論を目指します。

C：立論作成

立論から第二反駁まで、一貫して主張していく「核」に基づいて、一番基本となる立論を作っていきます。最強の資料と最強のロジックで構成していきます。

2. 立論・質疑

立論は原稿を読むだけというのは大間違い。常にジャッジの顔色や手の動きを見ながら、少しでも「？」という表情が見えたらその場で分かりやすく言い換えたり、詳しく説明したり、言葉を適宜強調して発言するような、臨機応変さが要求されます。質疑に対する応答も立論者の仕事です。誠意を持って回答していきましょう。

質疑について。裁判の時、尋問には主尋問と反対尋問が存在します。ディベートもこれと酷似していて、まず相手の立論の不明瞭な点を聞きだし、相手の議論を正確に把握したり、後々言い逃れのきかないようにしたりするのが1つの仕事。もう1つは不利なことを色々質問し、後々の反駁につなげていくための質問です。

3. 反駁

第一反駁では質疑で聞いたことを舞台に、相手の立論に総攻撃をしかけ、相手のメリット・デメリットが発生しないか、発生しても意味のないことを示しましょう。肯定側第一反駁では否定側第一反駁への再反論も行います。

そして第二反駁は、個々の論点ではなく、マクロな視点から自分達の優位性を主張します。価値の比較(価値観の妥当性の主張と、それに基づいた優位性の主張)を主にしていきます。第二反駁で出す結論に向けて第一反駁や立論は論理を展開していくわけです。逆に、第二反駁で出されるであろう結論を先読みして反駁していく必要もあります。

立論は4つの項目から形成されます。

1. 定義、2. プラン、3. 発生過程、4. 重要性

特に順番は決まっていません。一番分かりやすいように構成していきましょう。

1. 定義

ディベートの試合中で使う言葉の定義を、誤解を防ぐために行います。

曖昧な語句がない場合、省略可能です。

ex. 「原発」という言葉には核融合も含めるのかどうか

2. プラン

論題を具体化するためのだいたいの道筋や手順を示していきます。たとえば「日本は原発を廃止すべき」では何年までに廃止するのかなどを述べていきます。ですがこのプラン、論題を過不足なく満たすものでなければなりません。

論題を実行しなければならないと同時に、論題の範囲以上のことを言ってもいけないのです。なぜならディベートというのは、論題を肯定するか否定するかで争うものであり、プランはあくまでそれを具体化したものでしかないからです。ちなみにこのことを「論題充当性(topicality)」と言います。

ex. 「日本は選挙を義務化すべし」で「キャンペーンを強化し来させるようにする」というプランを示す…… x

ex. 「日本は陪審制を導入すべき」で「誤審を考慮し死刑を廃止する」というプランを示す…… x

ディベート甲子園では、否定側はプランを述べる必要がありません。

論題を否定するということは現状維持である、ということと解釈され、現状維持の具体的な手続きを示す必要などないからです。

3. 発生過程

メリットやデメリットが発生する理由を、様々な証拠資料や論理展開を用いて証明していきます。現状との比較をすると分かりやすいです。広く論じられる一般的な議論ほど証明の必要が少なく、証拠資料も見つけやすく、議論が楽になり、逆に奇抜なことほど証明の責任は重くなり、資料もほとんど見つかりません。

4. 重要性

哲学や社会学などの文献を持ち出して、価値観の説明をする機会が多いです。広い視野で論じましょう。

このテキストの確認

- 以下の論題が事実論題ならAを、価値論題ならBを、政策論題ならCを、ディベートの論題として適格でないならDを記入してください。
 - ・ [] 日本は平和維持のための武力行使を認めるべく憲法を改正すべき
 - ・ [] 新ガイドライン関連法案について
 - ・ [] 原子力発電のメルトダウンの危険性は0である

2. 誤りはどれでしょう

- A. メリットデメリット比較方式をディベート甲子園では扱っている
- B. ディベートはメリットデメリット比較方式でのみ行う
- C. メリットやデメリットは発生する確率とその重要性で評価する

反駁してみよう!

最も効率よく、以下のロジックに反駁(反論)してください。

- 「日本は全てのごみを有料化すべし」という論題で
「プラン：過包装を防止する法律を作成します。これでごみが減ります」
- ユニセフなど全ての慈善活動は、これを停止すべきである。なぜなら途上国では働き手を確保するために子供を多く産むから、1人救えば10人くらいに増えてしまう。つまり救おうとしてしていることがかえって貧困を引き起こし、事態を深刻化させているからである。
- 俺は酔っている。しかしそれを分かっている。だから酔っていない。
- 肯定側の政策は実行に5兆円の支出が必要です。財源はないのでこれは全て、国債によって賄われます。現在300兆もの赤字がある日本にとって、これは危機的です。
- 日本政府は学芸大学附属高校と渋谷を結ぶ地下鉄を創設すべきである。なぜなら国立高校としては唯一、へんぴな場所に存在しているから。

証明 Aという議論とBという議論を結びつけるために、あらゆる論拠を用いて、その関連を確定させること。

反証 証明を否定するための主張。やはりこれにも論拠が必要。

反駁 反論とほぼ同じだが、違いは「自分の意見の正しさを主張する」という含意。

断定 何ら証明されていない主張。言うだけ無駄。

整合性 証明する対象とその証明の次元がかみあっているかどうかという観点。

固有性 ある現象がある原因だけから発生しているのかどうかという観点。
つまり固有性のない原因を取り除いても問題は何ら解決しない。
例えば、プラン導入で発生するという否定側のデメリットは、現状維持であれば起こらない問題であるのかどうか、つまりそれはプラン導入によってのみ発生する、固有の問題、デメリットなのかどうかという観点。

内因性 現状のシステム内にその現象を起こす可能性があるかどうかという観点。
例えば、ある問題が解決するという肯定側のメリットについて、その問題が現状のままで解決したりしないかどうかという観点。
つまりプラン導入以外では問題は解決できななのかどうかという、メリットの固有性のようなもの。

解決性 問題が解決するという肯定側のメリットについて、それが根本的解決となっているかどうかの観点。

肯定側 現在の問題点を解決するためにプランを導入することを提案する立場。

否定側 現状に問題がないと主張するか、問題を認めつつ解決手法を否定する立場。

フィアット プランの中で述べたことは基本的に証明する必要がなく、論題と同一視され、仮定として扱われること。たとえばプランに憲法改正があった時、それが可決される可能性を論じる必要はない。

日本ディベート協会

<http://www.kt.rim.or.jp/~jda/>

- ・日本のディベート界の総本山
- ・一般向けのセミナーを実施

全国教室ディベート連盟

<http://member.nifty.ne.jp/debate/>

- ・ディベート甲子園主催団体
- ・中高でのディベート教育者(教師)による連盟

全日本ディベート連盟

<http://member.nifty.ne.jp/cqw22647/JCDF-HOME/>

- ・主に大学生や高校生によって運営される、身近な存在
- ・高校生ディベート研修合宿主催団体
- ・学生対象の各種セミナーを実施

学芸大学附属高校ディベート同好会ホームページ：

<http://voo.to/de> or <http://home.catv.ne.jp/kk/sim/dev/>

ディベートに関する質問や入会希望は：akiyoshi@nf.catv.ne.jp

The Way to DEBATE -簡易版-

発行 2001年5月1日

発行者 学芸大学附属高校
ディベート同好会

責任編集 志村哲祥